

# WiPCE2008（教育のための世界先住民族会議） に参加して

川上 将史（札幌市在住）

## 1. 3年に一度の教育に関する世界会議

2008年12月7～11日、オーストラリアのメルボルンで「第8回教育のための世界先住民族会議」(WiPCE: World Indigenous Peoples' Conference on Education)が行われました。私はこの世界規模の大会に出場したのは初めてでした。昨年の春頃に「3年に一度、世界の先住民族が集まる会議があるんだよ。そこで教育について考える集まりがあるから、機会があれば行くかい？」と、知人に声をかけてもらったのが参加するきっかけでした。

12月初旬、石井ポンペさん、萱野志朗さん、結城幸司さん、小野有五さん、ジェフ・ゲーマンさん、筆者の6名でオーストラリアに向かいました。現地に到着し、通訳をしてくれる方2名と合流しました。日本では冬ですが、オーストラリアは夏真っ盛りでした。

WiPCEはどのような会議かというと、簡単に説明するなら世界各国から先住民族が集まり、自分たちの置かれている教育の現状や取り組みについて報告する集まりです。前回はニュージーランドで開催され（本誌第121号に関連記事あり）、次回の2011年はペルーで開催予定だそうです。

今回、どのような国が参加していたのかというと、主にオーストラリア、アオテアロア（ニュージーランド）、アメリカ、ハワイ、ノルウェー、フィンランド、台湾、カナダ、そして日本でした。

## 2. 言語の継承・復活に関する発表から

WiPCEには、一つの国からたくさんの民族が参加しており（参加者約3000人）、発表を行う会場が散在していました。聞きたい発表が数多くあったのですが、すべての発表を聞くことができないため、興味のある発表に絞って聴きました。その中で私が気になった、関心を持った発表を2点書きます。

### (1) オーストラリア・クーリ『言葉を作る方法』

(12月8日、Concurrent46)

言葉を失ったオーストラリアのクーリ（koori）民族の発表は興味深いものでした。ナランギラン「理解する」という意味の言葉があるのですが、どのように綴るか分かりますか？と、会場にいる聴講者に対し、それぞれ綴りを書いてほしいと言われました。クーリ民族は、自分たちの言語が無くなってしまったため、自分たちで言葉を考えて、一般会話に少しずつ用いるようにしている、というのです。

私は「Narangiran」と、手元のメモ帳に書きましたが、クーリの人々が考えた綴りとは違っていました。「Nagrangilong」というように記すのだそうです。自分たちで言葉を考える際に、4つ重視していることがあるようでした。それは以下の項目です。

<言葉を作る4つの方法>

Word Compassion（言葉への思いやり）

Deliberation（熟考）



開会式で、オンカミ（礼拝）後にカムイノミ（神への祈り）をする筆者。  
写真提供・WiPCE運営事務局

## WiPCE2008（教育のための世界先住民族会議）に参加して

Meaning Extension（意味をつなげる）

Borrowing（多言語からの借用）

もう一つ、クーリ語の例で、チョコレート chocolate という外来の言葉も、自分たちで考えたスペルで記すと「Dyukulet」となります。

このような点を記した文法書を2年間で作り上げたそうです。今は単純な言葉しかないということでしたが、近い将来もっと高等な成果品を作ると発表の中で言われていました。言葉を作った際に現地の新聞「Koori Mail」に情報を載せて、普及率をあげることをしているそうです。そして言語の問題だけではなく、集団的土地権利問題にも取り組んでいるそうです。発表していたクーリの方が大事にしている言葉は、「前を見る 後ろを見る（過去と現在を見ないと、自分の歩く道を見失ってしまう）」という言葉でした。

自分たちの言語をすでに失ってしまっているので、2年間、専門学校形式で10人のクーリ民族出身者に集中的に授業を行っているそうです。現在、専門学校に通っている方は年齢幅が26～58歳で、事務費用として年に一度、50豪ドル（約3000円、08年12月レート）を支払わなければならぬそうです。ですが、この学校は公立なので、州が学費を出資するため、学費に関して個人負担は一切なしとのことです。言語の復活はアイデンティティの復活につながるため、自分たちの学んでいることをコミュニティと共有することも重視しているそうです。

### (2) ニュージーランド『マラエ (marae)』

(12月8日、Concurrent 96)

マオリのワイカトという民族出身の発表を聴きました。言語の保存に努めている方で、自分が行っている実践の例を紹介していました。

言語はアイデンティティに欠かせないもの。まったくマオリ語を話せないマオリを集めて、教える方法をとっています。歌や踊りに使う言葉は、間違えても使い続けないと無くなってしまうので、なるべく使うようにしているそうです。

近年はマオリ語を使う仕事が増えているとの



マオリのパフォーマンスに筆者（後列中央）も参加。写真提供・WiPCE運営事務局

ことです。大学にはマオリ語を話すスタッフがいるため、大学を利用して話せる環境を提供しているそうです。マオリ語を用いて、知識・伝統を話すことも重視されており、大学でこのようなことを開発することも大切に考えられているようです。

Language Forum（言語に関する公開討論会）を大学内で定期的に行い、そのときに多く利用する場所が、マラエ (marae) と呼ばれる建物です。このマラエは大学が建設したそうです。

マラエは、スタンディング・プレイス、話し合いの場、交流の場、土地との関係を確かめる場としての要素を持っている場所です。マオリにとってマラエは、地域社会の中心をなす祭祀集会場で、どんなお金持ちでも、貧しくても、ここでは平等で、上下関係が発生しないという決まりがあるそうです。

2時間ほどかけて Language Forum が行われますが、まず伝統的な祈りを行い、その後、議論テーマを発表します。議論を開始し、それぞれが英語ではなくマオリ語を用いて議論し合います。議論の後、皆で食事をして Forum は終了となります。

Language Forum に参加した方からの感想が紹介されましたが、その内容は「すごく良かった。良い環境で話せて良かった」「マオリ語で議論できて良かった」「大学の職場では英語しか話せないのでマオリ語で議論することができて良かった」「これからも Language Forum を続けたい」という讃辞が多かったと、発表者は話していました。

発表者は、このマラエを、若者を育てる場に

## ■ WiPCE2008（教育のための世界先住民族会議）に参加して

もしたいと思っています。そうすることで、言葉を伸ばす場、文化を残す場として使っていきたいと、話を纏めていました。

私がとても関心を持った講演の内容を2つ紹介しましたが、今回のWiPCEで合計10回ほどの講演を聴きました。ここではすべて書ききれず割愛しますが、全体を通して感じたことは、各国の先住民族は公の場で話す際に、自分たちの言葉で神に祈る、または少しだけ自分たちの言葉で話をしながら、英語で話し始めることが多いように感じました。耳にして英語とは違う言語だと解りますし、祈る際の厳肅な面持ちを見ると、自分たちの言葉に誇りを持っていることが窺えました。もちろん発表の内容は各民族さまざまで、教育・文化・言語・商業・政治というテーマで展開していました。

### 3. アイヌ民族の発表から

私たち、日本の先住民族であるアイヌ民族も、自分たちの置かれている教育の現状を発表しました。

私が報告した内容は、私が昨年度まで仕事をしていた地元、北海道沙流郡平取町二風谷で行われている事業「アイヌ文化環境保全対策調査」で、職場内でアイヌ文化、アイヌ語の勉強会をし、相互に学び合っていることについて発表しました。この報告で取り上げた「アイヌ文化・アイヌ語」について、私が興味を持ったきっかけについて述べます。

2003（平成15）年度に平取町の文化財課が主管し行った事業「アイヌ文化基盤創出事業（略称：クラスター）」で半年間雇用してもらい、そこでアイヌ文化の基礎を学んだことがきっかけになりました。この事業にはアイヌを出自とする住民（自分自身がアイヌ民族の系譜を持ち自覚のある者、妻・夫どちらかが前者の条件を備える者）が雇用されました。

どのような事業だったかというと、原寸大の「pu（足高倉）」を建てる、「puづくり」に際



閉会式での地元アボリジニの若者のパフォーマンスシーン

して樹木を伐採する直前に行うカムイノミ kamuynomi（神への祈り）、トマ toma（ごさ）編み、ハッ hat（やまぶどう）やシケレペ sikerpe（きはだ）等の採取、シト sito（団子）やチマチエプ cimacep（焼き魚）などの料理を作る際の下ごしらえ、アイヌ文様の彫り方、イナウ inaw（神に供える御幣状の物）の削り方、口承文芸（カムイユカラ kamuyukar、ウエベケレ uepeker、ユカラ yukar）の勉強、などを行いました。それぞの担当分野は男女別で差がありますが、神事に関わる作業以外は、男女の区別なく作業をしました。私もトマ編みもしましたし、料理の作り方も教わりました。

また、口承文芸ユカラの一部を覚え、同年11月に行われた、財団法人アイヌ文化研究・推進機構が主催している事業の「第7回アイヌ語弁論大会 イタカン ロー」に出場し、賞を頂いた頃からアイヌ語・アイヌ文化に対する興味が少しづつわいてきました。

そして、いま一番力を入れて取り組んでいることは、アイヌ語で会話することです。至らない私ではありますが、自分で出来る事を少しづつ、自分のペースで取り組んでいくように心がけています。

パクノ カ クヌイエ ニシバ ウタラ マタイヌ ウタラ  
pakno ka ku=nuye. nispa utar, mataynu utar,  
イヤイライケレ iyayraykere ! （これで私が書くことは終わりです。紳士の皆様、淑女の皆様、ありがとうございました！）

※「WiPCE 参加報告会」を北海道大学で5月29日開催予定。18ページのイベント紹介参照。